



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聴取者にとっての演奏表現の芸術性 : テンポのゆらぎに焦点を当てて
Author(s)	張, 旭穎
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16981号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16981
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99825
Type	doctoral thesis
File Information	Xuying_Zhang_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名：張 旭穎

審査委員	主査	特任教授	安達	真由美
	副査	教授	川端	康弘
	副査	教授	結城	雅樹

学位論文題名

聴取者にとっての演奏表現の芸術性：テンポのゆらぎに焦点を当てて

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、音階およびアルペジオという極めて単純な刺激と、演奏表現の要因を全体的テンポ・局所的テンポのゆらぎという時間構造に絞り込むことで、音楽演奏の「芸術性」を規定する要因を精密な実験計画で検討している点に大きな特長がある。複雑な楽曲全体を対象としがちだった従来の研究とは異なり、本論文は、時間構造が楽曲の芸術性という主観的印象にどのように寄与するのかを、基礎心理学研究の王道である厳密な実験デザインで検討し、今後の研究にも応用可能な実験パラダイムを提供している。さらに、演奏に対する「好み」、演奏の「表情づけ（表現の豊かさ）」および「上手さ」という印象評価と芸術性評価との間の相関構造を整理し、「芸術性」を多次元的印象の一側面として位置づけ直そうとしている点も意義深い。本論文で得られた着実な知見は、音楽心理学や演奏科学という実証的研究領域だけではなく、芸術性を哲学的に論じる音楽美学や、芸術的な演奏へと生徒を導くための実践的な音楽教育学など、今後の研究に広く貢献するものとなることが期待される。

学位授与に関する委員会の所見

本論文は、「芸術的演奏」という概念を、実際に演奏する側である演奏者からの視点ではなく、演奏を享受する側である聴取者からの視点から定義しようとしている点に独自性がある。そのため、演奏者にとっての芸術的演奏における時間的操作の特徴を明らかにした先行研究に基づく複数の仮説と新たな発想からの予測の検証を可能とするような実験パラダイムを、新たに設定する必要があった。張氏は、このための予備的研究を3つの実験を通して行い、30音からなる刺激を用いることの必要性を示した（第2章）。この内容は、国内唯一の音楽心理学の学術雑誌である『音楽知覚認知研究』に掲載され、高い評価を得ている。また、長調の刺激で行なった実験（第3章）の内容は、テクニカルレポートとしてHUSCUPに掲載されており、毎月一定のダウンロード数が記録されている。今後、長調（第3章）、短調（第4章）、無調（第5章）、調性の影響の検討（第6章）、複数の印象因子との関連性（第7章）での結果を包括的に議論するような英語論文を発表することで、張氏の開発した実験パラダイムとそこから得られた知見が、海外の研究者に向けても発信されていくことが期待される。

その一方で、口述試験では審査委員から、得られた結果に対してより俯瞰的な考察をすることが可能ではないかとの指摘に加え、階層線形モデルや構造方程式モデリングなどのより高度な解析法を用いて芸術性評価に影響を与える要因間の媒介構造を明らかにする必要があるのではという意見も出された。これらの指摘に対し、張氏は、学位論文の内容を個別の論文にまとめていく中で、今回指摘された点を検討していくことなどを言及し、審査委員会として納得できる内容であった。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士（人間科学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。